

# 弦楽器工房を訪ねて

50回記念  
拡大版

モラッシー・ファミリア  
Morassi family

モラッシー工房、クレモナを代表する弦楽器工房の一つだ。現代の弦楽器製作者の巨匠の一人、ジオ・バッタ・モラッシーが1954年に開設し、優秀な弦楽器と多くの弦楽器製作者を輩出した。  
そのジオ・バッタが第一線を退き、息子のシメオネ・モラッシーが後を継いだ。そのシメオネは従兄弟のジョバンニ・パティスタとともに、モラッシー・ファミリアとして工房を盛り上げている。今年のクレモナ・モンドムジカの直後、工房を訪ねた。

取材・写真・文／佐瀬亨



◀シメオネ・モラッシー（左）と従兄弟のジョバンニ・パティスタ。互いにリスペクトしている

## Laboratorio (研究室) と呼ばれる工房

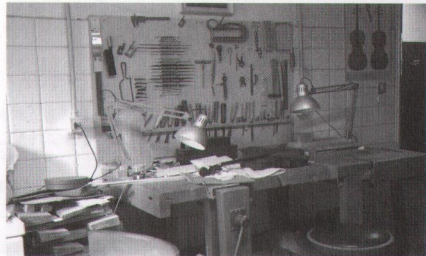
モラッシーの工房は、クレモナの中心地の一角に、弦楽器の弦やパーツなどを販売するショップとともに建つ。一等地であるが袋小路になっており、静かな落ち着いた場所だ。シメオネ・モラッシーが、にこやかに迎えてくれた。

「Laboratorio」とシメオネは自分の工房を呼ぶ。単なるモノ創りのほかに「研究室」という意味を持つ言葉だ。「弦楽器製作には二つの種類があつて、従業員を雇って1年に100本以上の楽器を送り出す『工場』のようなところ。もう一つは、私たちのように、作り手自身がプロデュースをして製作をするところ。このスタイルでは、年に10本程度しか楽器を作ることができません」と説明する。

モラッシーの工房では、近隣の弦楽器製作者が集まるデイスカッションタイムを毎朝、設けている。理系の大学の研究室のような趣（おもむ



▲製作を行うシメオネ。楽器を前にすると一流の仕事人の顔になる



▲シメオネの仕事部屋。柔らかな内光が差し込む。内部は機能的にまどまどしている

き)だ。取材当日も終了後の午前10時にミーティングが始まっていた。「ここは、弦楽器製作に関する提案や意見交換の場です。これは重要ですが、なぜならヴァイオリン製作は一生学び続けるものであり、楽器と音質の美しさを追求するものだからです。私は若い人に楽器製作を教えますが、同時に彼らからも学びます。こうして若い世代が伝統を継いで成長していくことは喜びです」と語る。「子どもの頃から父の仕事場で遊んでいました。そしてヴァイオリンの演奏も習得しました。中学校から高等学校に進む頃には、ヴァイオリン製作の道をごく自然に志しました」と語る。クレモナの国立弦楽器製作学校に入学する前に、スクロールなどのパーツを作り、ヴァイオリンを父の指導で作った。1984年、同校の卒業試験に合格した。一方、幼少の頃から学んだヴァイオリン演奏はヴァイオラに転向、同じ年にウディーネ(イタリア北部の都市)音楽院の5年次試験に合格した。「どちら

かに専念しないと、両方ともモノにならない。だから製作家を選びました」と笑う。以降は、父の工房で修行を続けた。1989年のミッテンヴァルト国際弦楽器製作コンクール、96年のヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン製作コンクールなどの名門弦楽器製作コンクールで第1位などを受賞した。

## 現代クレモナ弦楽器の復興を受け、隆盛を引き継ぐ

1966年、クレモナ生まれのクレモナ育ち。徹底的に生地にこだわる。そのクレモナの弦楽器製作はストラディヴァリの時期に隆盛を極めた後、退潮していた。「弦楽器の製作地としてクレモナが復興したのは、第二次世界大戦後のことです。当時のクレモナには楽器製作者がいまませんでした。国立弦楽器製作学校開校の際にはハンガリーから教師を招いたのです。父は1950年学校に入学、54年に卒業してクレモナに工房を開業しました。58年には製作学校



▲朝のミーティングの前に、今日、集まったメンバーたち



◀▲ジオ・バッタ・モラッシーとシメオネ親子。クレモナ隆盛の志は確かに受け継がれている

の先生になりました。ピエトロ・スカロポットらとともに新たなクレモネーゼ・スクールを作りました。ジョルジュ・スクラーリ、ステファノ・コニア、といった新世代のヴァイオリン製作者を輩出しました」

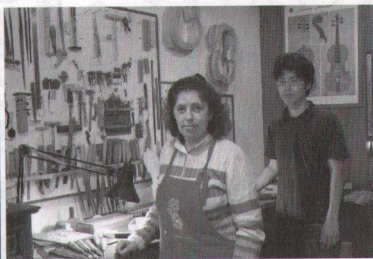
終戦後の経済的にも厳しい時代、製作学校を卒業しても楽器製作者になれなかった人たちがばかりだった。ジオ・バッタやパルマに工房を持ったレナート・スクロラヴェツツァなどは珍しかった。「父、ジオ・バッタは、ヴァイオリン製作を名譽ある職業」にしました。後進には、自分が得た経験を秘密にせず、情熱を持ってすべてのものを生徒に与えました。さらに、ミラノのジュゼッペ・オルナルティとフェルナルド・ガリンベルティからの薫陶も受けました。そのエネルギーは凄まじかった」とシメオネ。

そんな困難な時代を乗り越えた20世紀の巨匠の精神を引き継ぎシメオネは、クレモナの楽器作りの未来を見つめる。現在、イタリア弦楽器製作者協会(ALLI)の会長を務める彼は、「音楽」は平和を創るもの。ヴァイオリンがそれに貢献できれば素晴らしい」と理想を語る。社会的にも経済的にも難しい局面にクレモナの楽器製作も立たされている中で「ALLIは、若い弦楽器製作者にとって、良い状況を作らなくてはならないのです。クレモナの価値を高め、楽器製作がより芸術として認められる形になるのが目標。アマティ、グァルネリ、ストラディヴァリを産んだ街です。しかし、彼らの楽器のコピーを作るのではなく、製作者と演

奏家が協力をして創意を持って高品質な弦楽器を作り続けなければなりません」と意欲を見せる。その一方で「残念ながら、それは異なる方向へ進む人もいますが、それは間違っています」と警鐘を鳴らす。

### 祖国イタリアの街と自然から創意を取り入れる

楽器製作に取り入れる創意のインスパイアをイタリアの芸術から受ける、と言う。「フィレンツェ、ヴェネツィア……伝統がある街を訪ねます。建物ならドウオーモ、人や芸術、遺跡ご存知のように、イタリアは各県ごとに違う文化を持っています。それらに触れることで、多くのインスピレーションが湧いてきます。もちろん、海や山の自然の中からも。それをクレモナに戻って、自分に取り込むので



▲工房の朝は早い、すでに一仕事を済ませた二人。マエストロから吸収することは数多い



▲ストックヤード。シーズンがされた原料は半地下の部屋で楽器になる日を待つ



▲クレモナの中心地にあるモラッシー・ファミリーの工房。右手がショップになっている

#### DATA

**Morassi family**  
モラッシー・ファミリー

Via Lanaioli 3  
26100 Cremona, Italy  
<http://www.morassi.com/>

す」とシメオネ。

「でも、それを製作技術にすぐに反映させることは難しい。自分の中の大きな変化ではないのですが、その積み重ねが改善として現れるのでしょう。昔の作品を見ると……同じことは、今はできません。でも、それが大切なのです。スタートアップからゆっくり、変わっていきます。人が変わっていくことと楽器の作風が変わっていくことは同じです」

今年で、製作学校を卒業して30年。若い、と言われたシメオネもベテランの域に達してきた。従兄弟のジョバンニ・パティスタとは、ライバルでもあり協力者。二人で巨匠、ジオ・バッタ・モラッシーと先達が作った復興クレモナの伝統を守り育てる毎日が続く。